

長畑 萌・石金 浩史 (2012).
健全女性における身体・食物に関する認知の研究
日本心理学会 第76回大会, 専修大学

長畑 萌

摂食障害は近年その危険性が増加しており、厚生労働省の定める特定疾患（難病）に指定されている。また一度罹患すると治療が難しいことから、予防の必要性が強く訴えられている疾患である。その主な特徴として、身体や食物に関する歪んだ認知が挙げられており、摂食障害患者や食事制限をしている人々を対象とした認知研究は、様々な心理・生理的特徴を取り上げて行われている。摂食障害の傾向と脳活動との関連を取り上げた研究では、健全な参加者においても両者の間に関連が見られている（Shirao, et al, 2005）が、視覚的注意の働きと関連付けたものとしては、患者を対象としたものが多く、疾病による身体的な変化と認知面での変化とが分離できていないものもある。そこで本研究では、Smeets et al (2008) の用いた視覚探索課題を参考に、視覚探索のパラダイムにおいて、健全な女性において摂食障害関連刺激への注意の偏りが見られるか検討した。

身体に関する刺激、もしくは食物に関する刺激と、どちらも関係しないニュートラルな刺激を用い、それぞれの刺激がターゲットになる条件・ディストラクターになる条件を設けて視覚探索課題を行った。その際反応時間を測定すると共に脳波を測定し、各条件における事象関連電位N2の潜時と振幅を算出した。事象関連電位N2は、後頭部において観測される際、注意の働きを反映すると言われる電位である（Folstein & Van Petten, 2008）。

実験前後に実施した質問紙の得点を説明変数とし、各条件における反応時間および事象関連電位N2の変化率を従属変数とした分析を行った。その結果身体に関する刺激については、ターゲットとなる条件で体型不満が高いほど反応時間が早くなり、N2の振幅が小さくなるという結果が得られた。そして食物に関する刺激については、ディストラクターとなる条件でやせ願望が高いほど反応時間が遅くなり、過食が高いほどN2の振幅が小さくなるという結果が得られた。また実験前の α 波パワーのピーク周波数について検討したところ、摂食障害傾向の総得点が高いほどピーク振幅値が大きくなっていった。

反応時間の分析において、摂食障害の傾向が高いほど身体関連刺激は早く捕捉され、食物関連刺激はターゲットの補足を妨害するという結果は、摂食障害患者を対象としたSmeets et al (2008) と同じ傾向である。このことから、健全な参加者においても摂食障害の傾向が高まることで、患者群と同様の注意の偏りが見られることが分かった。脳波の分析における摂食障害傾向とN2振幅との間の相関は、注意の偏りをより強く裏付けるものである。また身体に関する刺激と食物に関する刺激とで、異なる摂食障害傾向の下位尺度と相関が見られたことから、身体・食物そ

それぞれの歪んだ認知には、異なる心理的特性が関与している可能性がある。食物刺激については、N2振幅と反応時間との間でも異なる尺度との相関が見られており、認知処理の段階により違いが生じる可能性についても今後検討する必要があると思われた。

引用文献

- Folstein, J.R., & Van Petten,C., (2008) Influence of cognitive control and mismatch on the N2 component of the ERP: A review *Psychophysiology*, **45(1)**, 152-170.
- Smeets,E., Roefs,A., van Furth,E., & Jansen,A., (2008) Attentional bias for body and food in eating disorders : Increased distraction, speeded detection, or both? *Behavior Research and Therapy*, **46**, 229-238.
- Shirao,N., Okamoto,Y., Mantani,T., Okamoto,Y., & Yamawaki,S., (2005) Gender differences in brain activity generated by unpleasant word stimuli concerning body image an fMRI study *British Journal of Psychology*, **186**, 48-53.